

2023年12月15日 江戸の大殉教400司教団ミサ

『現代の血を流さない殉教』

✠パウロ大塚喜直

今から400年前の1623年12月4日、徳川3代将軍家光の命により、宣教師を含む信者50名は小伝馬町の牢から江戸市中を引き回され、東海道沿いの札の辻、現在の田町駅付近から品川に至る小高い地で、火刑に処せられました。

殉教とは、恐ろしい拷問に耐えて死んだというところにのみ偉大さがあるわけではありません。信徒であれば誰も「いざというとき、自分は殉教するだろうか」と考えますが、多くの人は、自分は弱いから殉教など決してできないと言うでしょう。確かにそれは正直ですが、それでは殉教者のことを何一つ理解していないこととなります。人は誰でも、自分は殉教する覚悟があると公言できるものではないと思います。しかし、迫害に直面し、最後に殉教者になった人たちは自分の精神の強さのゆえではなく、神への信頼と恵みによって決断できたのです。自分の努力ではなく、ひたすら神により頼むこと、この神への信仰があったからこそ、いざという時に殉教は人間の決断となったのです。

殉教とは「証しする」という意味ですから、殉教者が証しするのは、自分の信仰の強さではありません。それは「神の愛」のすばらしさです。いのちをかけて、神の愛を明らかにするのです。この殉教の原点が、キリストの死なのです。キリストは、御父のみ心に沿って、人類の罪を贖うために自分の命を捨てました。その愛が、十字架での犠牲によって、全うされたのです。

わたしたちは今日、どのような思いで、江戸の殉教者たちを記念するのでしょうか。現代の日本では、幸いにどの宗教を信じていても迫害されることはありませんが、それだけに、信仰をもっている、それを「生き生きと」生きることが難しくなっています。

わたしたちは洗礼を受けた後、どう生きているのでしょうか。自分のことばかり考えていて、周りの人々の救いに無関心ではないでしょうか。自分の信仰を他人に伝える意欲があるでしょうか。洗礼を受けたということは、神の愛を信じる者として、神の愛を知らない人々に示す責任が与えられたということです。わたしたちが個々の人生で神の愛をどのように示すかは千差万別ですが、共通することは、キリストの教えに従って、神の愛を信じ、互いに愛し合うことです。

聖アウグスチヌスは殉教者の死について、こう語っています。「殉教者たちは、自分のいのちを主に捧げたのです。その命は、一人の方、キリストの命によって贖われたものです。キリストは、どれだけ多くの人々のいのちを贖ったことでしょうか。殉教者たちは、神から授かったものを神に返したのです」。この「神から授かったものを神に返す」ということは殉教者だけでなく、すべての人に求められることです。わたしたちの人生は自分自身のものではありません。その始まりも終わりも自分の意志では決められず、自分の力では変えられないものです。

その意味では、殉教には「血を流す殉教」と「血を流さない殉教」があると言えます。人の一生は不可解で神秘的なものですが、どちらも神に捧げる人生です。様々な困難や苦悩に直面し、生きる目的や希望を失ってしまうことがあります。また、そこまで深刻ではなくても、自分の置かれた状況に納得できなかつたり、自分の幸せを感じられなかつたり、自分の意思とは異なることを強いられたりするときがあります。そのようなときには、わたしたちは「神から授かったものを神に返す」という殉教者の精神を思い起こすのです。

江戸の殉教者たちは、殉教者になるために信仰を生きたわけではありません。殉教者たちは、苦勞と嘆きとつかの間の喜びのつまった日々の生活の中で、自分の「この世のいのち」と引き換えに、神から与えられている「永遠のいのち」があることを決して忘れなかつたのです。だからこそ、迫害が迫ったとき、「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない」というイエスのことばに全幅の信頼を掛けたのです。自分たちの苦しみは、必ず喜びに変わると信じたのです。まさに、ペトロが言うように、イエス・キリストを信じる不動の希望を生き生きと生きていたのです。

わたしたちは今、果たして現代の殉教者になることができるでしょうか。キリスト教の信仰を徐々に周辺に押しやる考えが蔓延するという、新しいタイプの迫害に直面しているからです。「私がよければ、それでいいじゃないか」とか、「人に迷惑かけなきゃ、いいじゃないか」とか、さらに、この世の中、確かなものなどないといった虚無感の形をした、価値観の危機といったものが、人々を神不在の生き方へと誘惑していきます。このような現代の誘惑は、教会の外部からよりも、信者の内側をとおしてやってきて、いつの間にかキリスト者自身が求める救いそのものが世俗化されはじめています。経済的に豊かで便利な暮らしも、それ自体は悪いことではありませんが、人間のいのちや人権、環境、平和など、普遍的な価値のあるものや福音的な生き方と、日常の生活が対立するときに、どちらを選ぶかが必ず問われるのです。神の愛を選択する機会は死ぬまであります。神からいただいた命を豊かに生きるか、粗末に扱うか、その誘惑はあらゆる選択に潜んでいます。いざというときにどんな犠牲をはらってでも神の愛を選択するか、拒否するか、本当の迫害はまさに身近にあるのです。

キリシタン時代の日本の殉教者たちは、現代の生温いわたしたち信仰者を大きく揺さぶっています。わたしたちは、キリシタン時代の殉教を、遠い昔物語、歴史的な事実としてだけ記念するのではなく、信仰の証しとして、語り継がなければならないのです。教皇フランシスコは4年前、訪日の際に、日本の教会を励ましてくださいました。「日本の教会は小さく、カトリック信者が少数派であることは知っています。収穫は多いけれども働く人は少ないことを知っています。だからこそ、皆さんを励ましたいのです。福音宣教の熱意を冷ますようではいけません。」

皆さん、元和年間の京都の大殉教、長崎の大殉教、江戸の大殉教400年を記念した日本の教会が、神の摂理に感謝し、新しい宣教の決意を持って、神の愛を証し、平和と希望をもたらすことができるように、このミサの中で、祈りたいと思います。